

受け継ぐ学び舎

厩の改修と道具小屋の再生による養沢活性化

作品名	受け継ぐ学び舎	作品番号	1/5
校名	日本工業大学		
氏名	野本 榛奈		

02. 養沢の人のつながり

■ヒアリング調査

養沢活性化委員会

養沢で生まれ育った住民と養沢に魅力を感じ移り住んできた人で構成されている。養沢の問題の1つである人工林は、地元住民の山主が持っているため自由に活動することができない。

そらあけの会

山主である池谷さんを中心に育林活動を行っている。メンバーは市外から通っている。

上垣さん



- 若狭朝やカフェ、若のテラリウムづくりを行っている。
- 養沢の豊かな環境が若を育むためビジネス展開したいという。
- お店は空き家だったのを改修したモデルの一つである。

- 資源を活かしたビジネスを展開してくれる人が増えてほしい。
- 市外の人と住民の中で将来の危機感が差がある。
- 製材する際に無駄な木の使われ方をされてしまう。
- 木について学べるといいと思う。

池谷さん(山主さん)



- 先祖から相続された山を持っている。
- 現在は市外に住まわれている。
- 月に2回ほどボランティアメンバーとともに育林を行っている。

- 育てた木をどのように活用すべきか先が見えない状況。
- 山の魅力を多くの人に伝えたい。
- 養沢の資源を活用しビジネスを展開してくれる移住者が増えることを願っている。

基川さん



- 野人魂忍術士 風塵一党指導役
- かながわ自然光コンベンションビューロー専任者
- 各地の道場やイベントで活躍されている。

- 森林が好きなので養沢に魅力を感じ移住を決めた。
- 植林するとしたら、ビジョンを持って植えることが必要。
- 経済だけでなくその場所をどう豊かにするの考えることが大切。

赤瀬さん、岡根さん(メンバー)



- ボランティア活動を通して日々の疲れを癒すことができる。
- 様々な職歴を持つメンバーがいるため交流の場になっている。
- 若い世代がいなくてこの先が見えない。
- 山の魅力と豊かさを体感してほしいと思っている。

竹縄さん



- 古民家大峰やグランピング施設を経営されていた。
- 私有林と一部共有林を持っている山主さん。
- 養沢で生まれ育った。
- 山の本を活用したウッドデッキや植風景を製作。

- 山主同士のつながりは少なく山の管理を放棄している人が多いという。
- 課題である、空き家と山の人工林を解決していきたいが空き家や山を貸してくれる住民が少ない。

岩谷さん、日比さん(メンバー)



- ボランティアに長く通っている養沢の魅力は、育林だけでなく山 菜採りや山道づくりなどに携わるからだという。
- 池谷さんの人柄や何とかしようとしている姿に惹かれた。
- 木を活用していくべきだが先が見えていない状況。

小澤さん



- 養沢で生まれ育った。
- 養沢活性化委員会の若手メンバー。
- 将来的に養沢の資源を活用しカフェを経営したいという。

- 養沢には仕事が少ないため若い人が市外に移住してしまう。資源を活用し自分たちでビジネスをつくらなければならない。
- 養沢活性化会員の中でも、地域で団結するの、外から新たな人を呼び込むのか方向性が定まっていない。
- 養沢の住民も最初は移住してきた人に警戒心を抱くが新しい住民が増えることが嬉しいと感じるという。

木工連キトコト



- 多摩地域で長年木と向き合ってきた木工職人の技術集団。
- 多摩産材を使った家具や教育玩具を製作。
- 子供たちに木工体験や林業体験学習を行う。

- 養沢に魅力を感じ、知人に声をかけられたこともあり養沢に移住されている。
- 木育の場である山は、地元山主の土地を借りているため自由に挑戦することが難しい状況である。
- 移住してきた人と住民との間はコミュニティが少なく打ち解けにくい状況だという。

01. 厩改修前と改修後の比較



①厩の現状写真
 ・大量の道具が置かれ奥まで進むことができない。
 ・所々、床板がはがれている。
 ・雨風にさらされ汚れが目立つ。

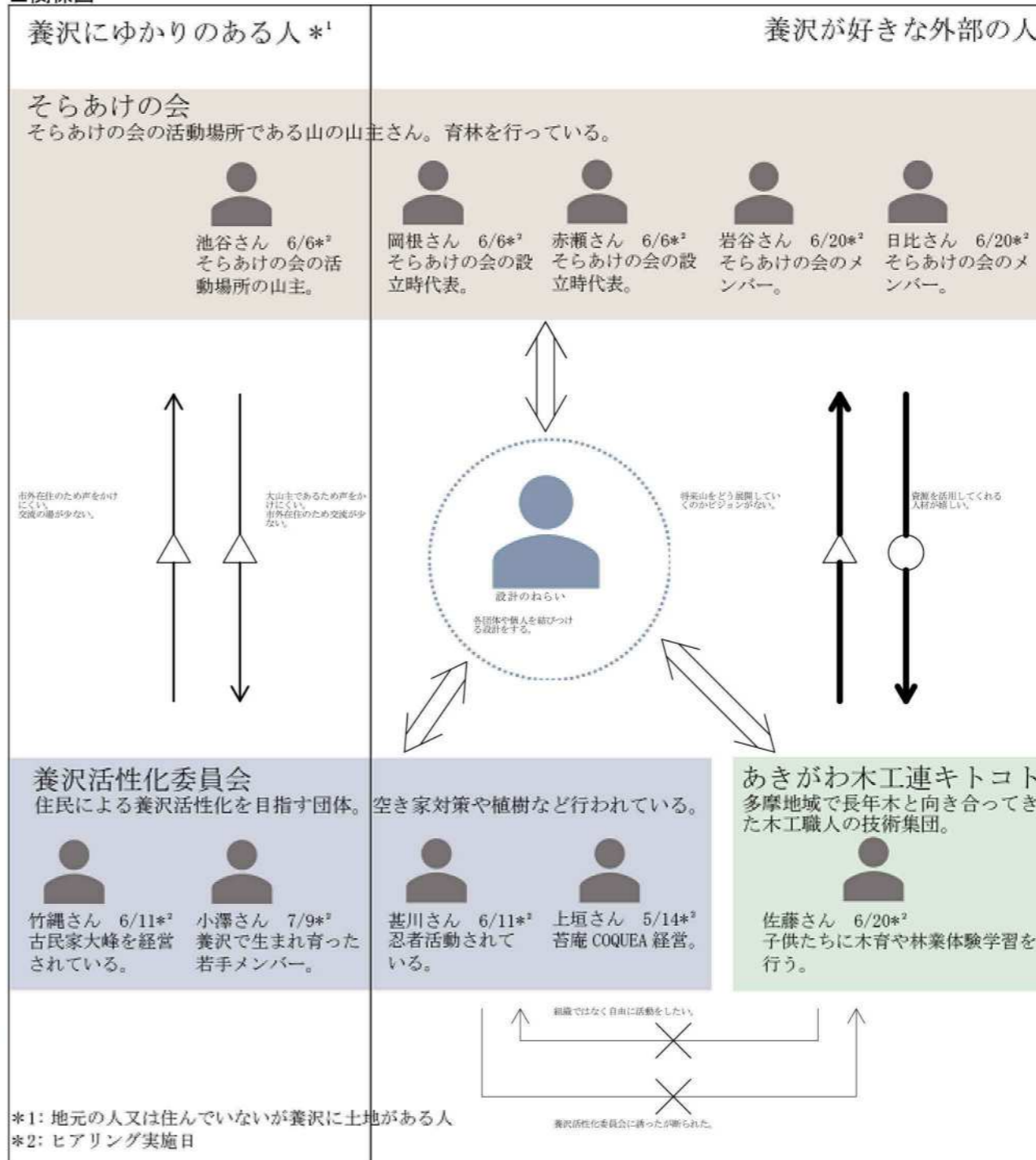


②厩の軸組模型写真
 ・計画調査から現状の厩の軸組模型を複製。
 ・部材の色や汚れ具合も現状に合わせて複製。
 ・柱や梁が腐り落ちている箇所を再現。



③厩の改修後写真
 ・改修後は「学びのカフェ」として地域の人々をつなぐ場所になる。
 ・濃い色の材木は既存の部材、薄い色の材木は新しく取り付けた部材になっている。
 ・既存の部材を活かすことで厩として使われていた歴史を受け継ぐ。

■関係図

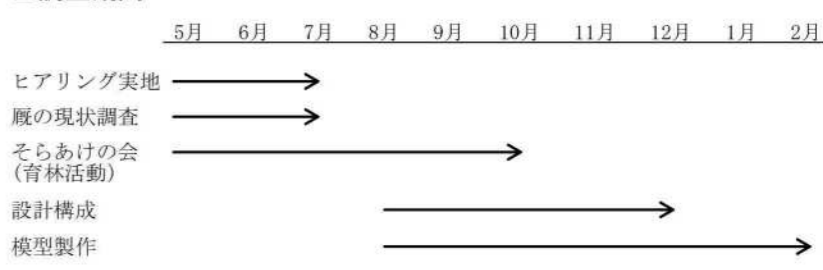


■ヒアリング調査のまとめ

- 【課題】
- 養沢に魅力を感じビジネスを展開する移住者と住民との間に大きなギャップが生じている。
 - 活動している個人や団体が結びついていない。
 - 養沢の将来に向けた明確なビジョンがない。
 - 挑戦したくても実行する場所がない。
 - 養沢の地域資源を活かされていない。
 - 養沢の将来を担う後継者が不足している。
 - 移住者が地域に入り込むのに時間がかかる。

- 【解決策】
- 移住者だけでなく、住民も取り入れた設計プログラムを目指す。
 - 共有の活動場所を提供する。
 - 地域全体で活性化を目指す必要がある。
 - 山主さんもメンバーに加わることで山を活動の拠点にすることができ、活動場所や内容の幅を広げることができる。
 - 地域資源を使ったプログラムやツアーを考える。
 - 若い世代に養沢の魅力を感じ、担い手になってくれるようなプログラムをつくる。
 - 養沢の住民の方を含めたイベントや活動の場を設ける。

■調査期間



03. 資源と厩の現状

■計画地

大山主である池谷さんの山も活動の場とした設計を行う。設計は厩の改修、道具小屋を新築する。



①厩 ②新築

■森の俯瞰図

そらあけの会に参加して発見した森の魅力や学んだことを表している。また、養沢の文化や厩の現状も表している。



厩の現状調査

(1) 厩の構造
1階は梁が落ちて腐っているところがあった。
2階は使われなくなった道具が大量に置かれていた。
3階は床板がはがれているなど危険な箇所があった。
伝統工法や釘を使わず継ぎである部分が見受けられた。



梁が腐れている 梁が腐れている 渡りあごの写真

(2) 厩の歴史
以前の厩は、家畜を飼ったり収穫した野菜を干したりする場所だった。
また、梁や雨戸には山仕事の仲間が賭け事をした跡や木の採寸のメモが残っている。



雨戸に計算の跡 雨戸と梁にメモの跡

養沢の風習

「七夕にサトイモの葉の上の朝露を墨にして短冊に書く」と、字が上達する」という話がある。また、「日本武尊が御岳山に寄り、疲弊した兵士に沢の水を飲ませたところ回復した。」という伝説もある。この伝説により沢の名前を「養沢」にしたという言い伝えがある。

植物

春はフラビヤゼンマイなど山菜が取れる。また、山の中に生えているオカメ笹は葉が取りやすく茎がしなやかなため竹かごの材料に使用されている。



オカメ笹 手作り竹かご 室のモビール

養沢の文化



杭づくり

山道を作る際に杭が必要になる。皮をむくことで腐りにくく長く保つことができる。皮むきしやすいヒノキ材を使用する。



杭づくりの様子 ナタ木の皮を剥くときや木を加工する時に使う。

枝打ち

家の柱や梁になるまっすぐな良材を作る作業のこと。梯子やステップを使い木に登りながら余分な枝をナタで切り落とす。枝がなくなり光が入り視界が開けることをそらあけという。



上 枝打ち用梯子 ナタ 枝打ち用の梯子。下 ナタノコ 間伐用で刃が鋭い。

わさび田

沢の水を活用したわさび田。日光が必要のため開けていて明るい。



わさび田の様子

休憩所

写真はそらあけの会参加時の昼食の様子。養沢の水で作ったお味噌汁を作った。



昼食時の様子

動物

ホタル、キツツキ、クマ、シカ、ムササビ、イノシシなど多種多様な動物を見ることができる。

畑

池谷さんとそらあけの会のメンバーが管理する畑。特産品であるのらぼう菜、じゃが芋、ブルーベリーなど季節



山手収穫の様子 のらぼう菜収穫の様子 畑の全体

川

山の腐植土を通った豊かな水は川に流れこみ、春には鮎や山女魚を釣ることができ夏は蜚を見ることができる。



川の様子

エゴノキの実

川の水をせき止め、その中に木の実の皮を取り除き水に入れると魚が痺れて浮かんでくるという。それを網ですくって取ったという。実に含まれるサポニンという成分が魚のエラ呼吸を止め呼吸麻痺になるためだという。



エゴノキの実

茶畑と休憩所

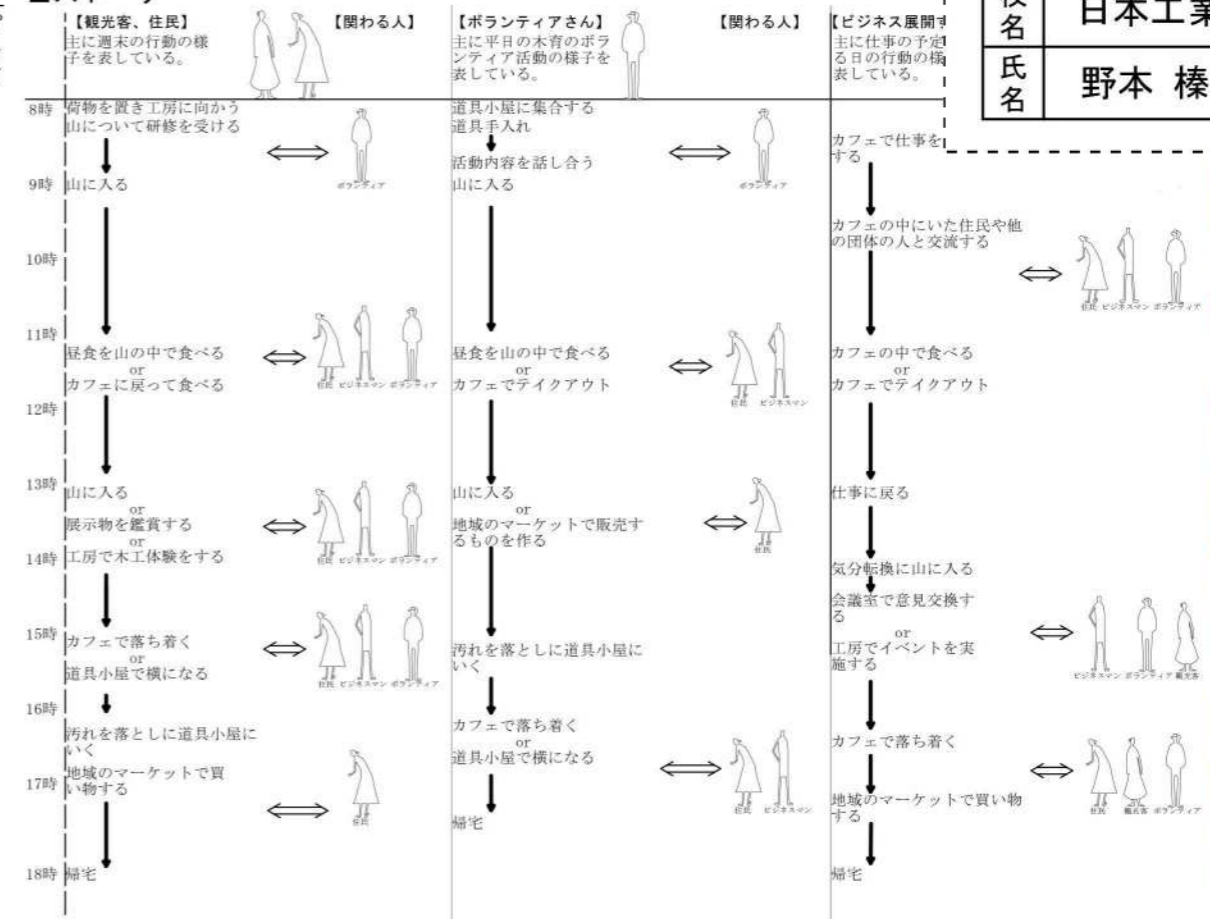
茶畑は太陽光が入るように開けていて明るい。休憩所は丸太のベンチに座りながら開けた茶畑を見下ろすことができるため心地良い。



茶畑の様子 休憩所の様子

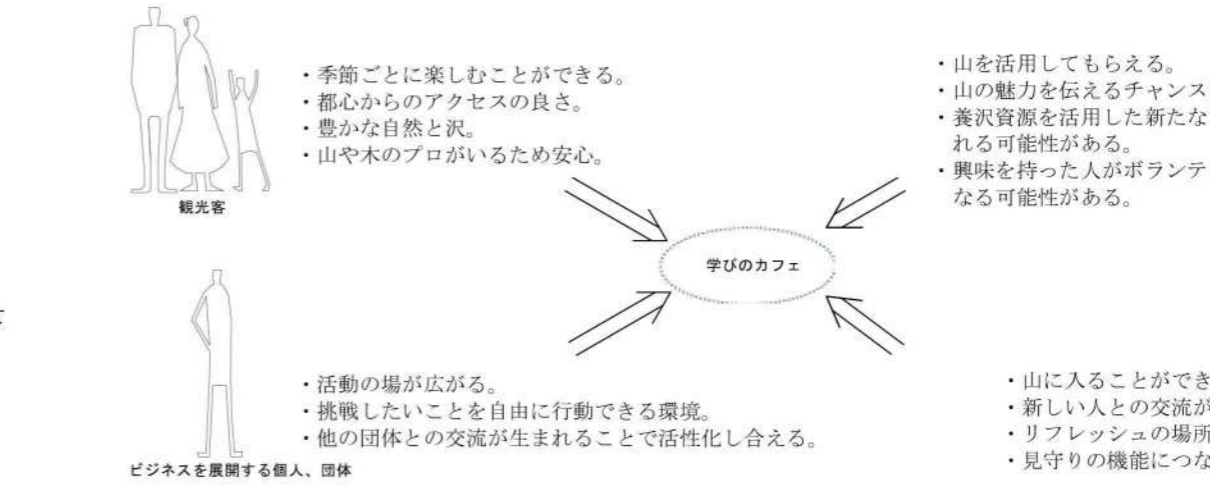
04. 設計のプログラム

■ストーリー



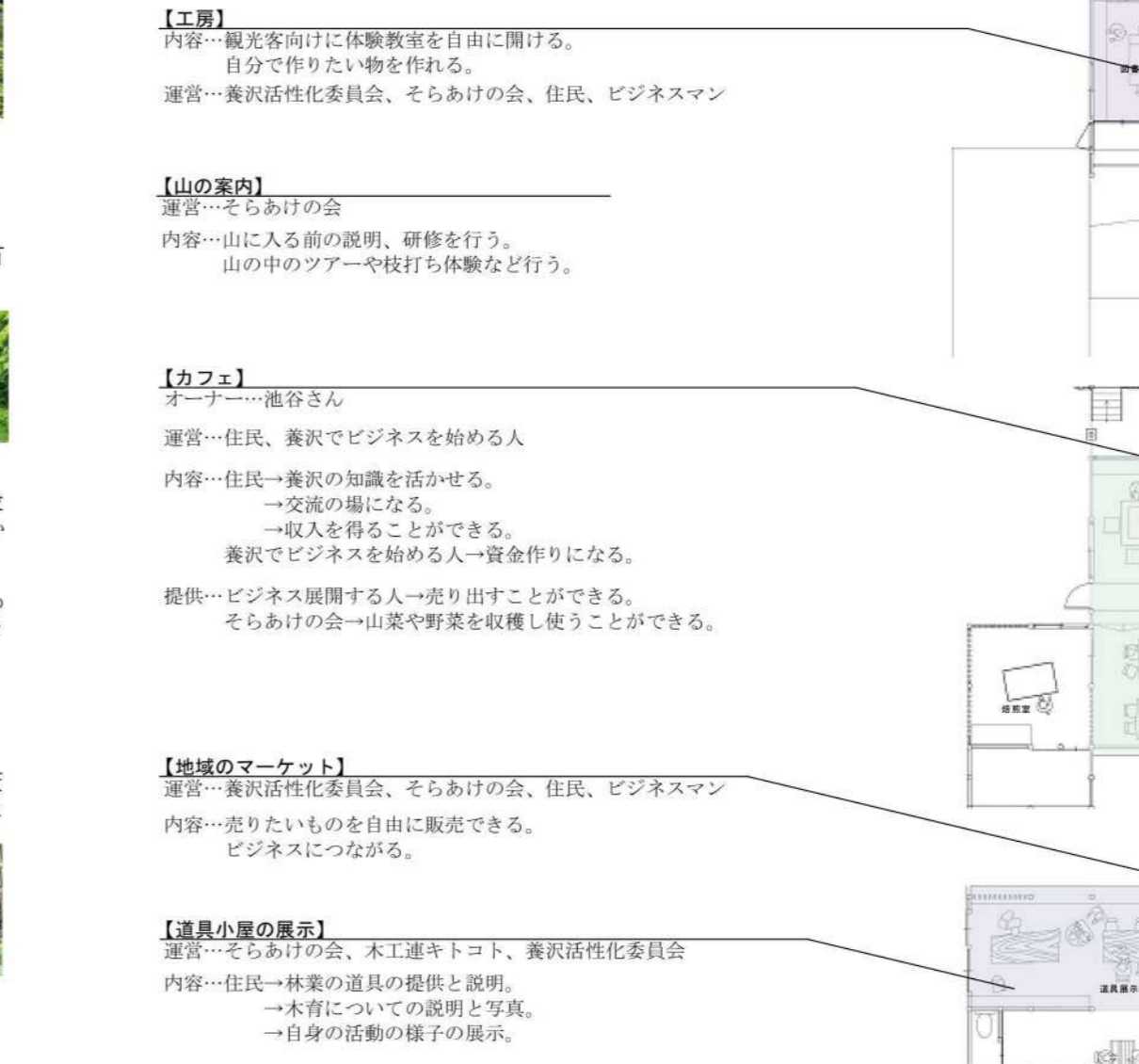
■設計の構成1

学びのカフェを通すことで観光客、移住してきた人、ボランティアさん、住民にそれぞれメリットが生じる。



■設計の構成2

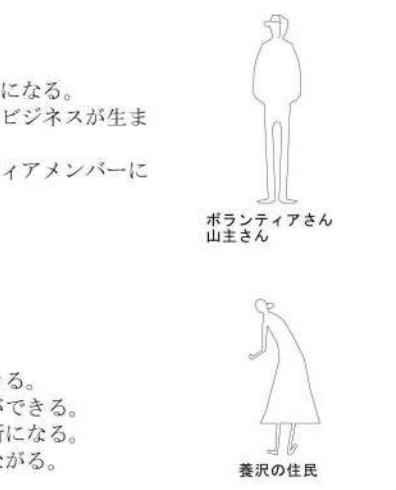
「学びのカフェ」や育林活動を住民、個人や団体が運営することにより、地域共有の活動の場を作る。それにより、それぞれにメリットが生まれるだけでなく交流しながら互いを活性化することができる。



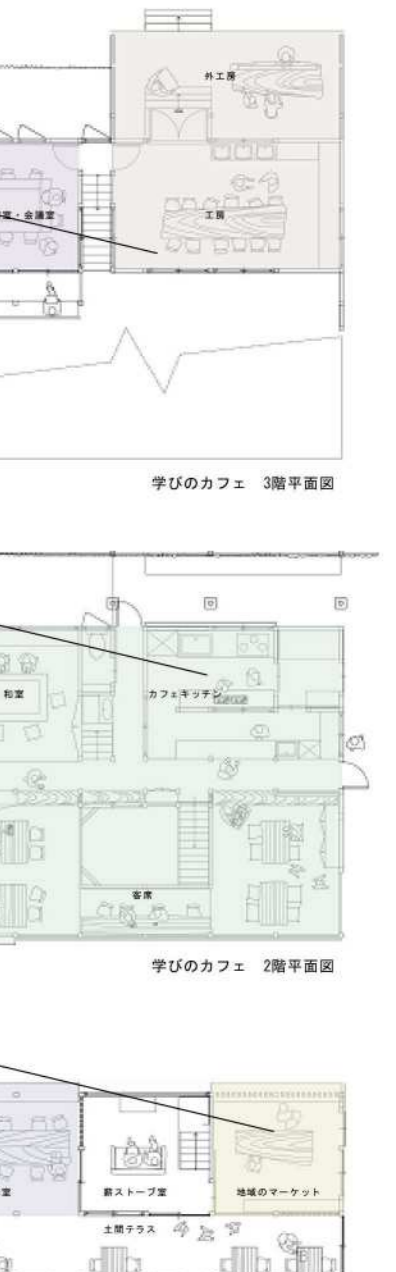
作品名	受け継ぐ学び舎	作品番号	2/5
校名	日本工業大学		
氏名	野本 榛奈		



山の中の昼食の様子 工房でイベント開催された時の様子 カフェの中の様子 図書館・会議室の様子



ボランティアさん 山まさん 養沢の住民

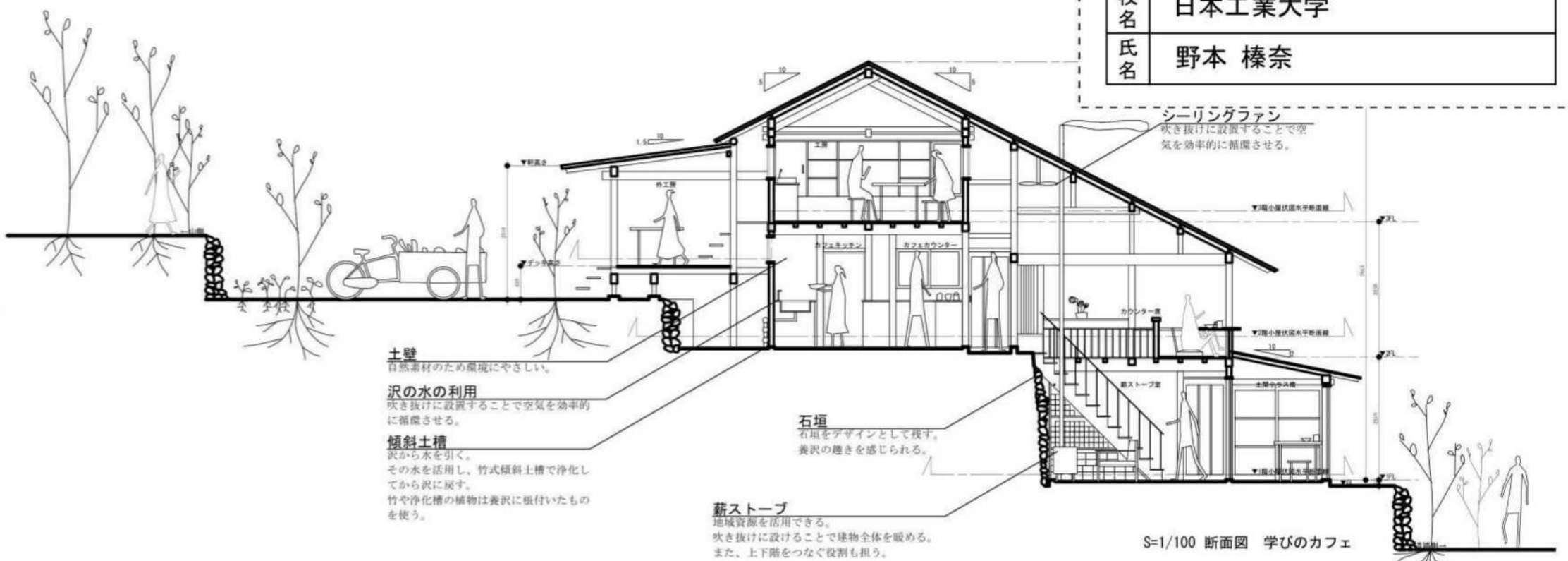


学びのカフェ 3階平面図 学びのカフェ 2階平面図 学びのカフェ 1階平面図

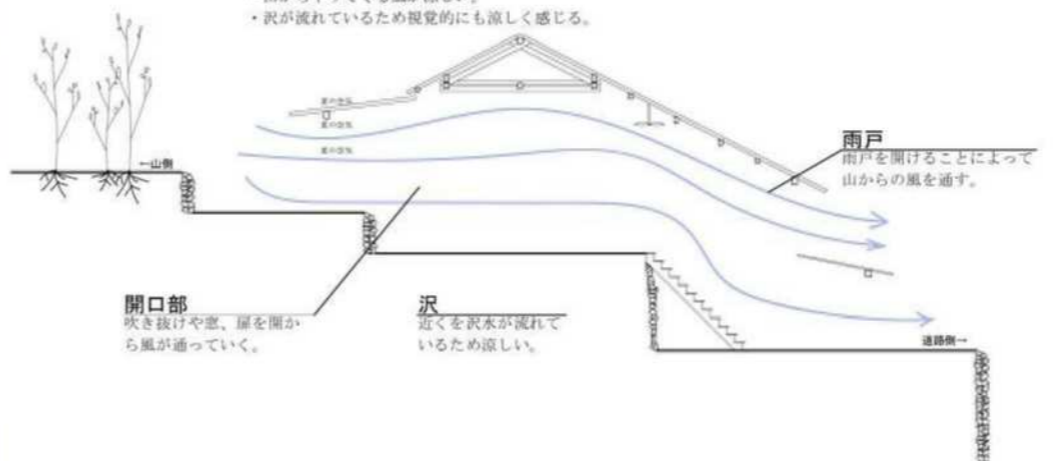
05. 学びのカフェ (改修)

作品名	受け継ぐ学び舎	作品番号	3/5
校名	日本工業大学		
氏名	野本 榛奈		

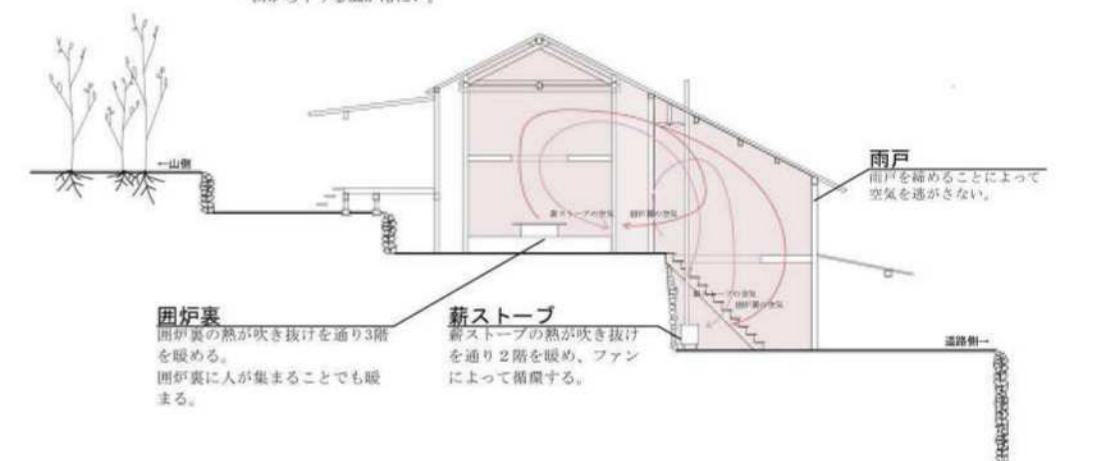
■既改修後の断面図



【夏の空気の流れ】

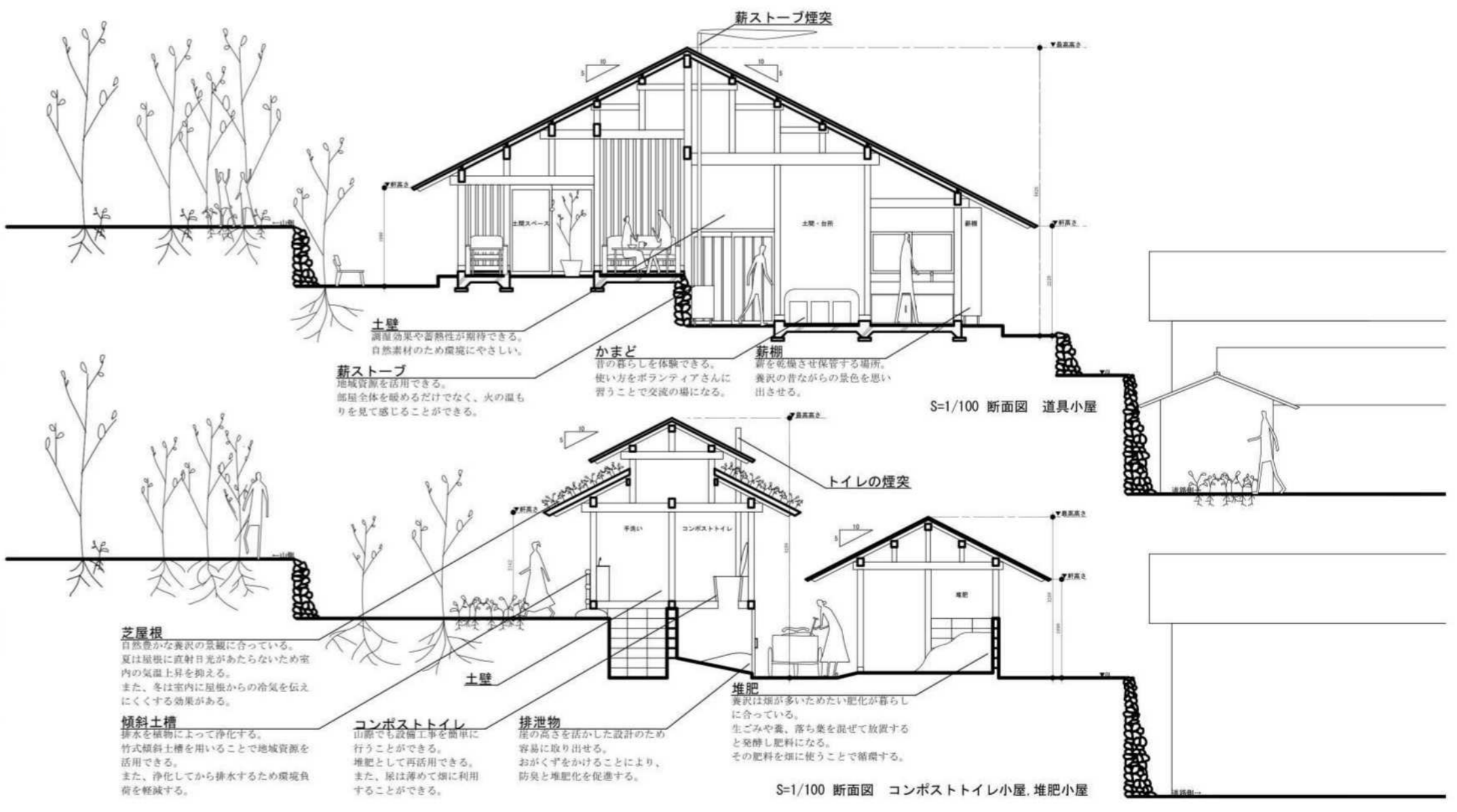


【冬の空気の流れ】



06. 道具小屋 (新築)

■道具小屋・トイレ小屋の断面図

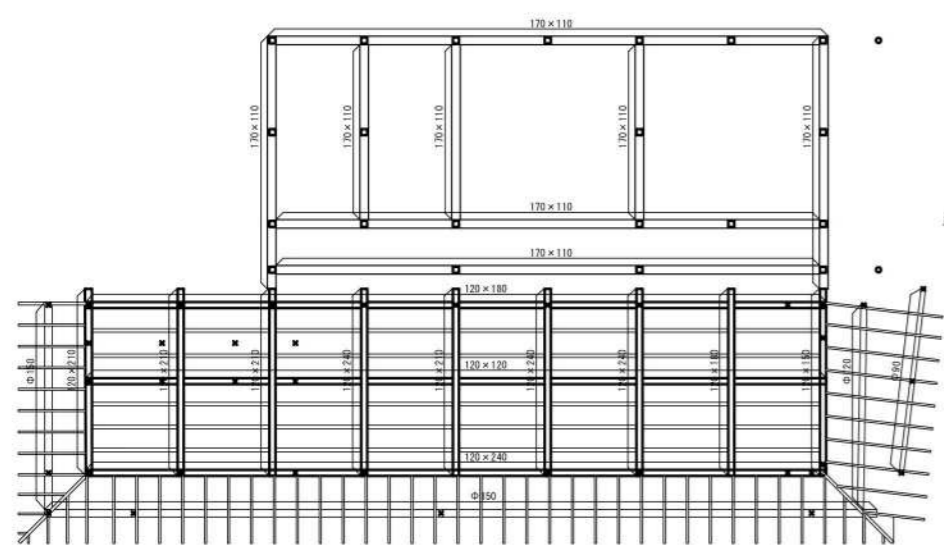


07. 構造の比較

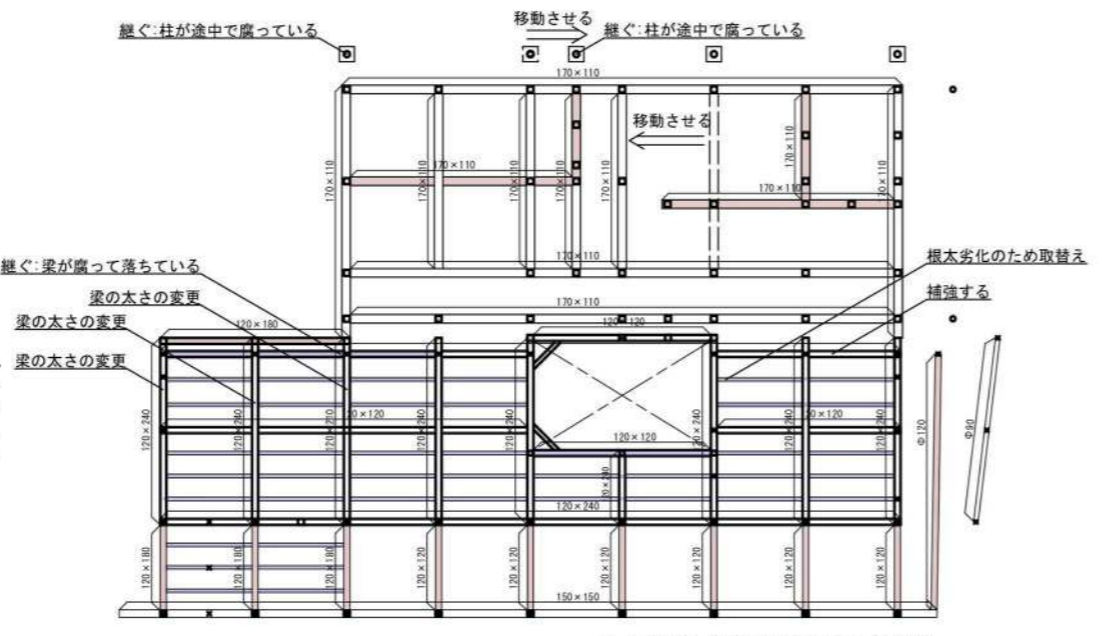
改修前の既と改修後の既の構造を比較した。既には伝統工法が用いられた様子や部材を継いである箇所が見つかった。その趣きを壊さないように意識して改修を行った。

- 【色の区分】
- ・新しく加えた部分 赤
 - ・取り除いた部分 緑
 - ・変更した部分 青
 - ・変更なし 無色

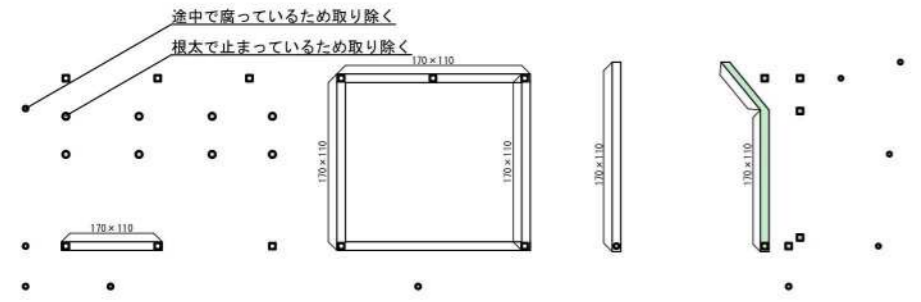
作品名	受け継ぐ学び舎	作品番号	4/5
校名	日本工業大学		
氏名	野本 榛奈		



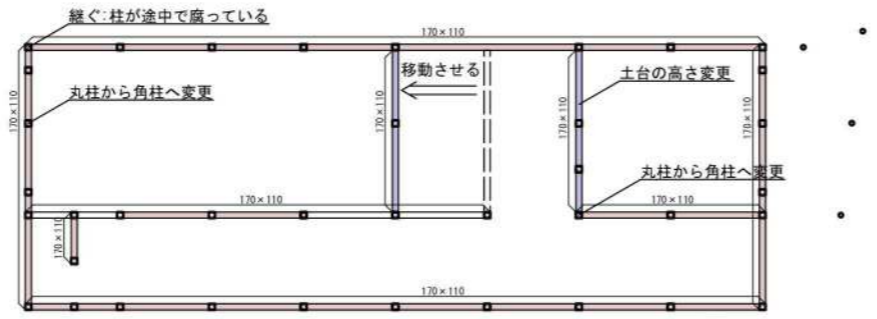
S=1/150 2階床伏図 (改修前)



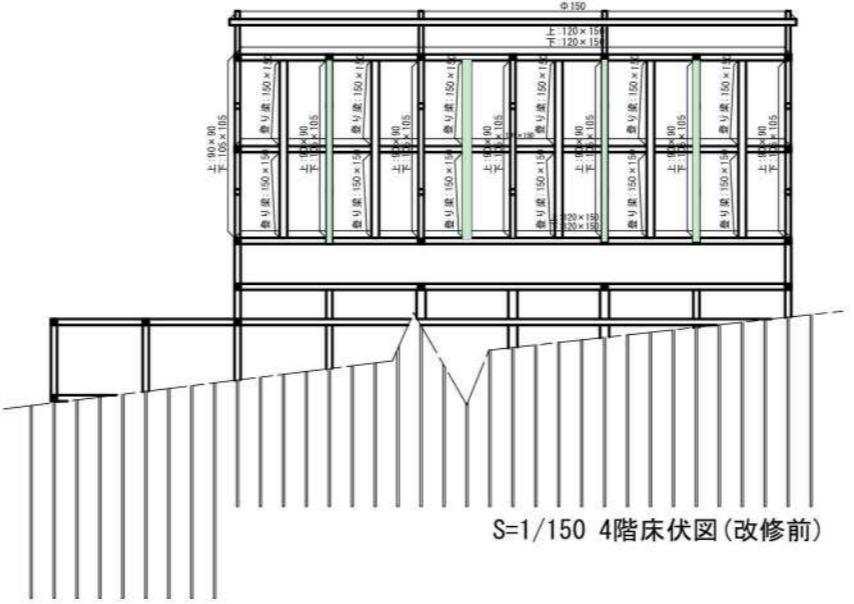
S=1/150 2階床伏図 (改修後)



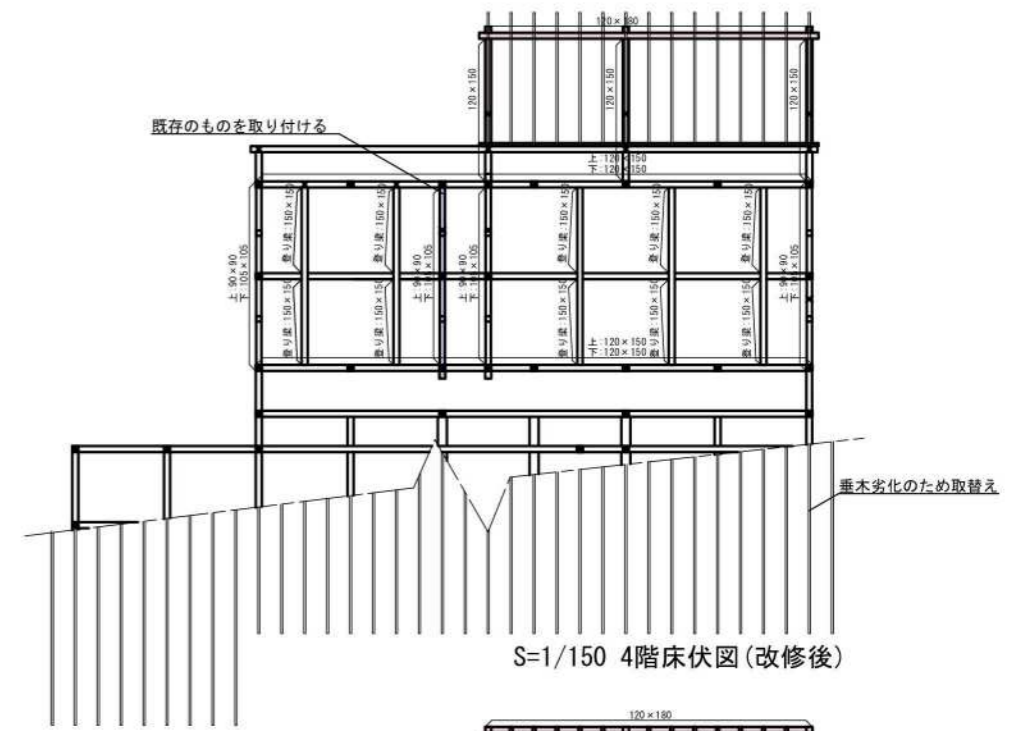
S=1/150 1階床伏図 (改修前)



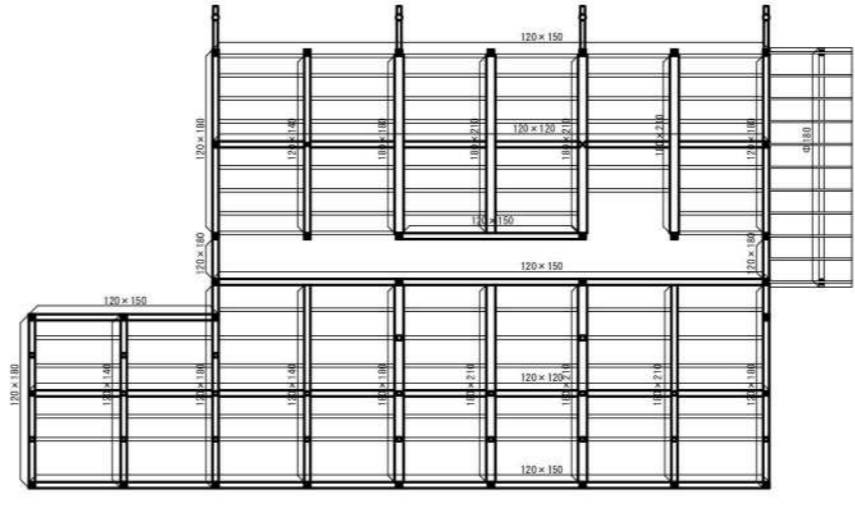
S=1/150 1階床伏図 (改修後)



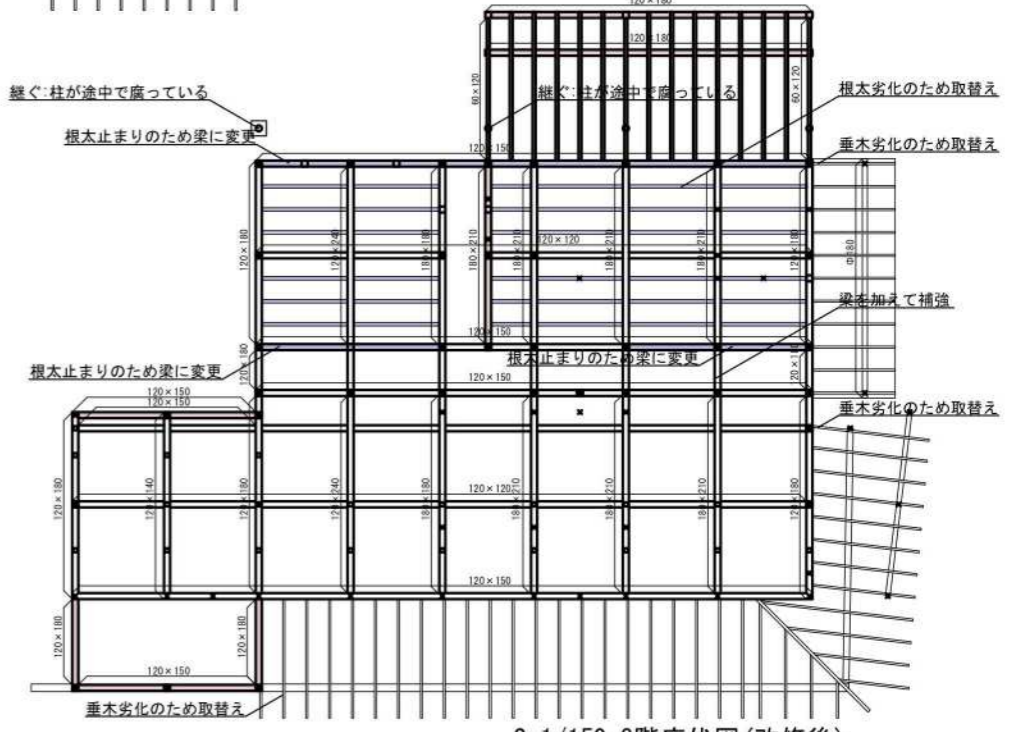
S=1/150 4階床伏図 (改修前)



S=1/150 4階床伏図 (改修後)



S=1/150 3階床伏図 (改修前)



S=1/150 3階床伏図 (改修後)

08. 平面図の比較

■学びのカフェ内観写真



シアトルから学びのカフェを見た写真
農家の自然豊かな様子が伺える。



工房から図書室を見た写真
互いの部屋を見通すことができつつある。



学びのカフェ入口の写真
真っ直ぐ伸びた土間から視線がぬけ、見上げると小規模な木を築く。



客席の写真
吹き抜けを通し上下階の関係性をつなげる。



土間テラスの写真
庭の風景を楽しむことができる。

■厩に置いてあった主な道具



ヒノキの梯子
木の木から作られた約10m以上の長さのヒノキの梯子。林業などで重宝されていた。



皮むき器
中に干し根菜を入れて両側の棒を川線に設置する。川の流れて中の野菜が回転し、木にあたり皮がむける。皮が木に流れて実だけが残る。



シュノーケル
木の桶のところに噛みモリで魚を突いて捕獲していた。外枠は木でできていて、ガラス部分から水中を覗く。



外工房を見た写真
通りから工房の様子を見ることができ興味を引く。



焙煎室の写真
客席から焙煎の様子を見ることができる。



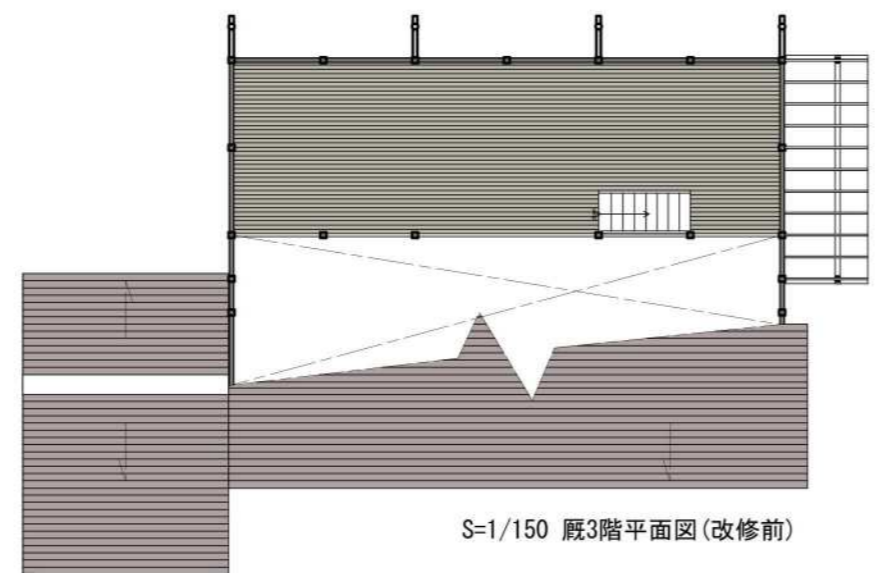
和室の写真
喫茶室を囲みながら会話をを楽しむことができる。



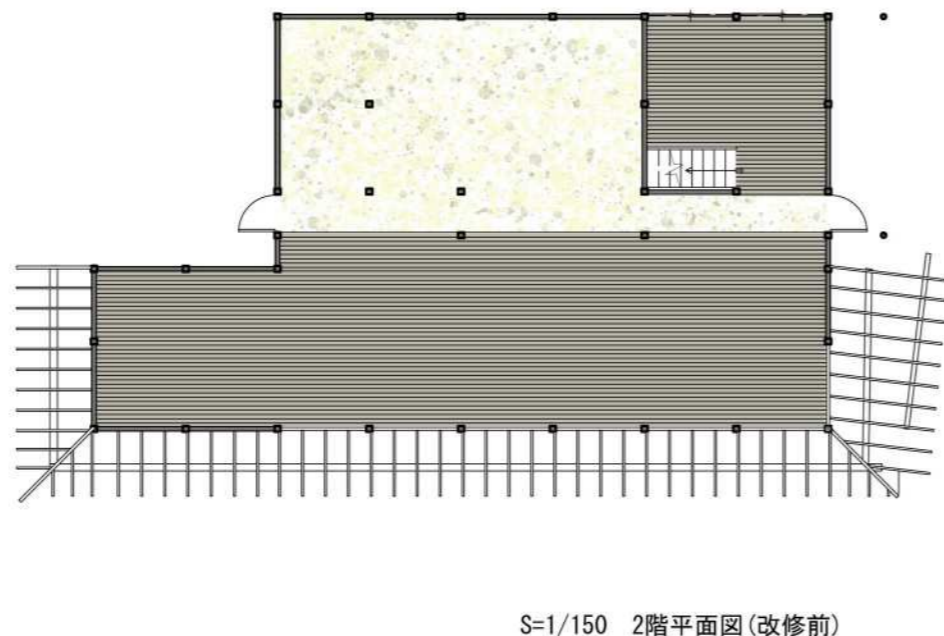
客席から和室を見た写真
和室を小上がりにすることで美観の景色を視線が重ならず楽しめる。



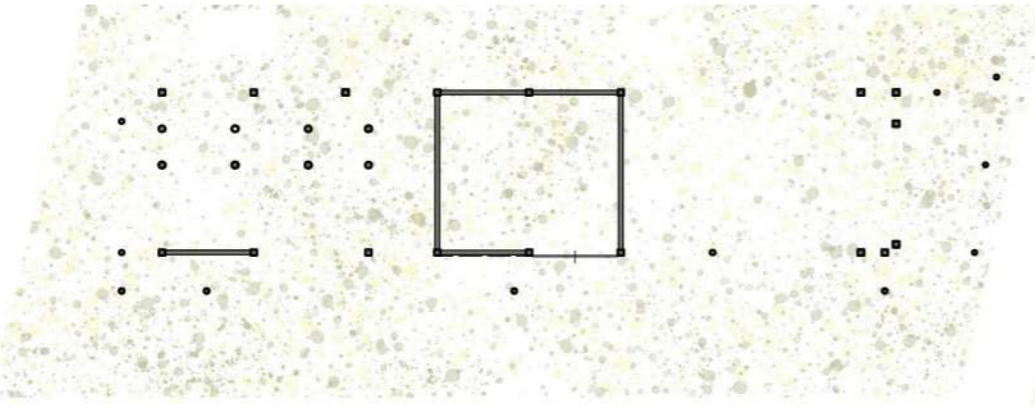
道具展示室の写真
山荘の道具や農具の暮らしに根付いた道具を展示されている。



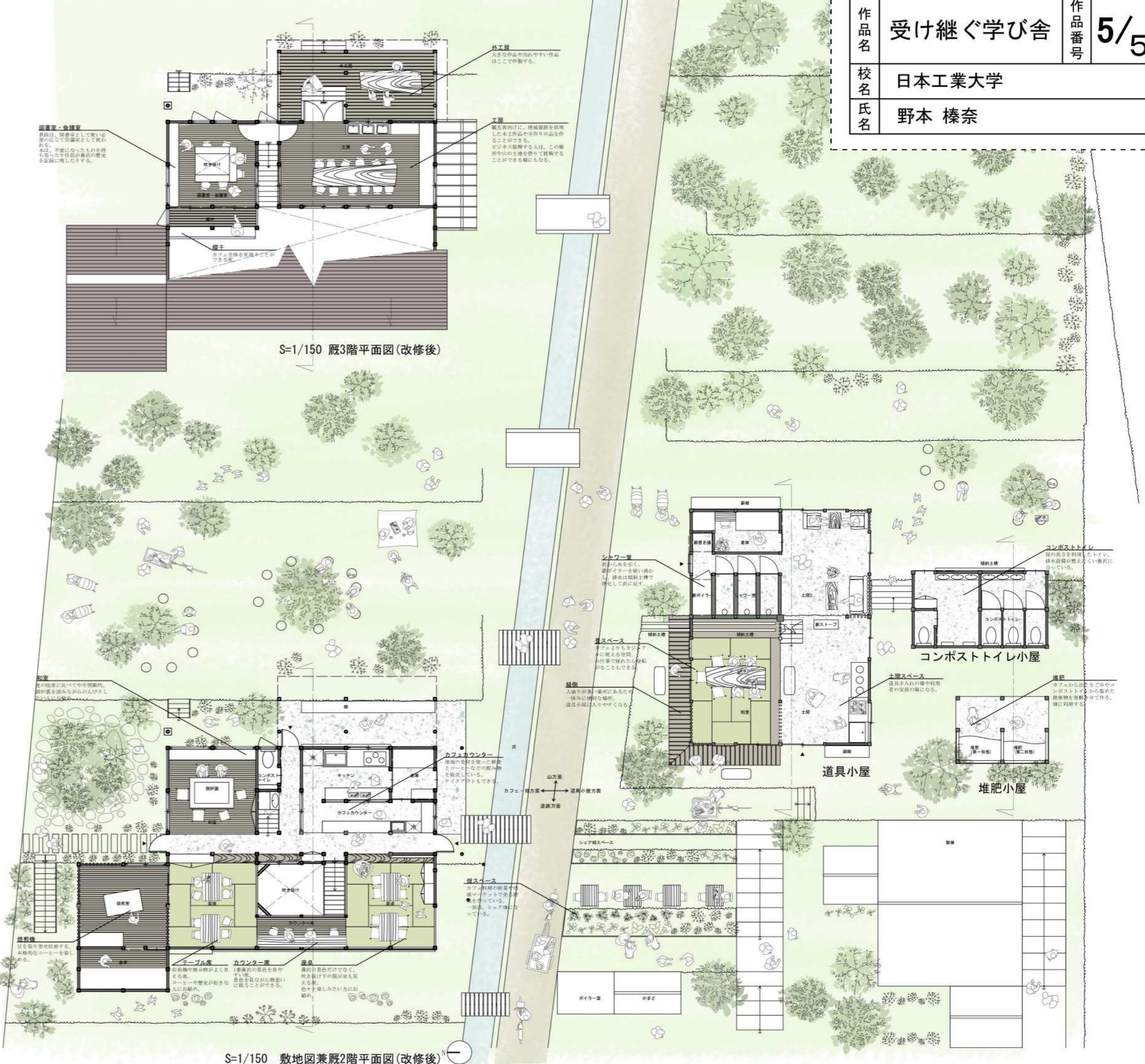
S=1/150 厩3階平面図(改修前)



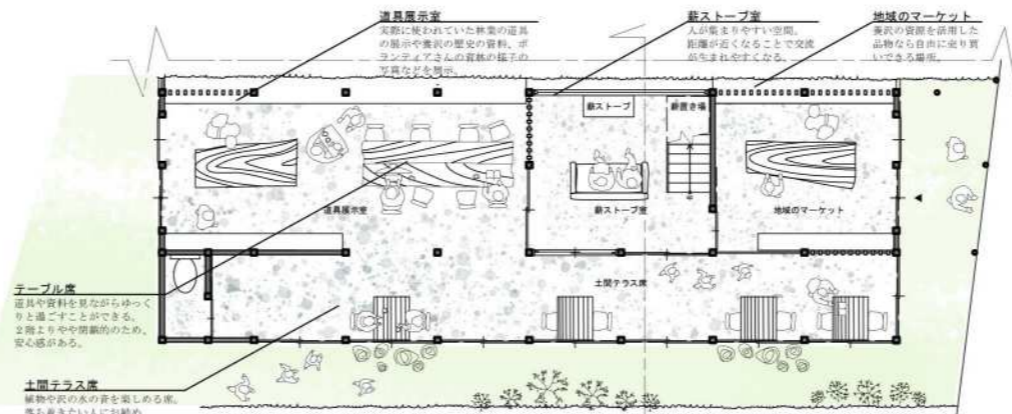
S=1/150 2階平面図(改修前)



S=1/150 厩1階平面図(改修前)



S=1/150 敷地図兼厩2階平面図(改修後)



S=1/150 厩1階平面図(改修後)

作品名	受け継ぐ学び舎	作品番号	5/5
校名	日本工業大学		
氏名	野本 榛奈		

■道具小屋、コンポストトイレ小屋、堆肥小屋の写真



土間2からかまどを見た写真
全体を見通すことができる。山に囲まれた木々が見える。家具は地域の木材を利用している。



土間2を見た写真
昔ながらの美観の石割を活かした設計になっている。山に囲まれた木々が見える。視線を変えながら緩やかに空間をつなぐ。



トイレ小屋を見た写真
細い道の先に木々が見える。先に眺みたくなくわく感がある。



堆肥小屋から道具小屋を見た写真
学びのカフェまで見通すことができる。昔ながらの空間気を楽しめる。



道具小屋から学びのカフェを見た写真
学びのカフェまで見通すことができる。横断しながら人の賑わいを楽しめる。



かまどの写真
堆肥小屋を使うことができるため環境にやさしい。交流の場になる。